

高知県西部の地震津波記念碑の 伝承内容と方法について

齋藤 平

〈要旨〉 高知県中部・西部の地震津波記念碑には、教訓型に分類されるものがある。それぞれの教訓の伝承方法には差異があり、視覚的直観で理解できるものと言語表現による伝承を受容者に合わせた解説を加えることで理解できるものに分けられた。前者の場合は視覚情報と組合せることで言語表現を最小限にとどめ、伝承に当たって効率的な機能を持つていることが明らかになった。

〈キーワード〉 宿毛市 はいたか神社 地震津波記念碑 南海トラフ

はじめに

高知県は太平洋に面することから、駿河湾から日向灘沖にかけてのプレート境界を震源域として概ね百〜百五十年間隔で繰り返し発生してきたいわゆる南海トラフ地震津波の被災地となってきた。

このため、沿岸各地には多くの地震津波記念碑が建碑されている。（注1）小稿では高知県東部の代表的な地震津波記念碑を取り上げて、その機能について考察したい。

一 宿毛市はいたか（鵜）神社の地震津波記念碑

宿毛市大島にあるはいたか（鵜）神社は海拔一〇・七メートルの高台に鎮座しているが、本殿への石段は四十四段ある。この石段の右手には奉獻碑が並べられており、左手には金属製の手すりが設置されている。（写真1）

右手の奉獻碑の中にひとときわ高い碑が二基ある。一基は七段目にある安政元年（一八五四）の地震津波記念碑である。



写真1 最上段からの奉獻碑

一八五四年（安政元年）十一月五日

の大地震で津波が此処まで押し寄せる

（右）平成七年十月神社新築記念

また、もう一基は四十一段目にある宝永四年（一七〇七）の

地震津波記念碑（写真2）である。

一七〇七年（宝永四年）十月四日の

大地震で津波の波が此処まで押し寄せ

大島浦全戸流失

（右）平成七年十月神社新築記念

いずれも平成七年十月の神社新築に合わせて整備されたことが刻まれており、それ以前にあった碑を新調して設置されている。石段も一段の高さをやや低くして改修されており、記録類に残る段数と異なることには注意が必要である。

この地震津波記念碑に記された宝永四年の地震津波については「小野家々譜」（注2）に記録が残されている。

宝永四亥年十月四日、大に地、震動し、山穿て水を漲し、川埋りて丘と成、浦中の漁屋悉く転倒す。逃れんとすれ共、眩暈て圧に打れ、或は頓絶せんとする者若干なり。係りし後は、高潮入りなるよしつぶやく所に、大津波打て島中の在家一所として残る方なし。昼夜十一度打来る。中にも第三番の津波高くて、当浦鶴社の石垣踏段三ツ残。

これによれば、地震によって家屋が倒壊し、さらに津波である「高潮」が予測されている時に大津波が押し寄せて全戸が流失したことを伝えている。石段は三段を残して浸水したことになる。

この記事について『宿毛市史』（注3）は「鶴神社の石段は四十二段であるので、三十九段つかった事になる。いかに

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）



写真2 宝永4年(1707)の地震津波記念碑

大きな津波であったかがわかる。」と記している。現在の石段は四十四段であり、平成七年の神社新築に合わせて石段が改修されたことから『宿毛市史』発刊時の昭和五十二年と総段数に差が生じている。さらにいえば、宝永当時の総段数が昭和五十二年と同じ四十二段であったかどうかは確認できていないが、現在の地震津波記念碑は、昭和五十二年当時の三十九段の位置ではなく、現在の四十一段の位置であり、実際の高さとは若干の差があると見てよい。

この地震についての『理科年表』（注4）の記事は次のとおりとなっている。

134

1707 10 28 (宝永 4 10 4) 332°N 1359°E M8.6

五畿・七道…『宝永地震』…わが国最大級の地震の一つ。全体で少なくとも死2万、潰家6万、流出家2万。被害は東海道・伊勢湾沿岸・紀伊半島で最もひどく、津波が伊豆半島から九州までの太平洋沿岸や瀬戸内海を襲った。津波の被害は土佐が最大、室戸・串本・御前崎で1〜2m隆起し、高知市の東部の地約20万km²が最大2m沈下した。

遠州灘沖から四国沖までの南海トラフ沿いの広範囲を震源とする巨大地震。

この記事からも土佐が地震津波による最大の被害地であり、その一つが宿毛大島であったことがうかがえる。次に、この地震津波記念碑の機能について考察してみたい。

地震津波記念碑は、大きく分けて「慰霊型」と「教訓型」に分類できる。

慰霊型は、地震津波で亡くなった被害者を慰霊するためのもので、死者の氏名や戒名を彫刻し、災害状況とともに被害者の人数を示したものである。拝礼の対象として花筒や線香立てが付随していることも多い。

教訓型は、被災者が後世に地震津波の際の避難の仕方を示したものである。

岩手県・宮城県に分布する昭和八年地震津波記念碑は、建碑の意図が教訓を後世に伝える目的を持っていた。教訓に

特化して、計画的に地震津波記念碑として建碑された点に大きな特徴がある。

一般的な教訓型地震津波記念碑は、地震津波の発災状況や被災状況を文章で説明し、その土地で後世にも地震津波が発生する可能性があることを述べ、日常から防災意識を持つことを訴求するものである。明治期までに建碑されたものは、漢文や文語文で記され、現代においては、地域住民が理解するためには、現代語訳などの解説が必要である場合も多い。

こうした類型の中で、宿毛市はいたか（鵜）神社の地震津波記念碑は、教訓型に分類できる。碑面に簡素にした確かな表現で地震津波があったこととその被災状況を述べている。そして、最も重要なことは、波高到達点を視覚的、体感として認識することができることにある。

教訓型は、教訓を記しているが、それはあくまでも書記情報であり、受容者が理解しなければ生かされることがない。ところが、宿毛市はいたか（鵜）神社の地震津波記念碑は、神社の石段に地震津波の波高到達点を配置することにより、視覚的、体感としてどこまで津波が到達したかを訴求するものであり、事実としては「此処まで」到達したことを示しているだけにもかかわらず、防災意識を醸成する上で大きな効果を持っているといえる。つまり、「過去にここまです津波が到達したことが歴史的に分かっているので、将来についてもその可能性があるから、地震津波の際は、少なくともその碑より高い場所に避難することを心がけておくとよい。」といった説明を刻む必要もないし、また、そのことを伝える人＝伝承者がいなくても教訓を後世に伝えることができるわけである。

こうしたことから、理解に一定の知識・技能が必要な言語表現による書記情報を最小限に抑えながら、しかも教訓の効果を最大限伝承していることになる。

なお、同様に神社の石段や高台を利用した波高到達点を示す地震津波記念碑は、高知県、徳島県でも見られるもので、

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）

はいたか（鵜） 神社石段が獨創性をもつものではない。

二 黒潮町加茂神社の地震津波記念碑

黒潮町加茂神社には、地震津波の予兆となる「鈴波」に関する地震津波記念碑がある。（写真3）安政元年（一八五四）の地震津波についての教訓型記念碑である。碑面が歳月を経て摩滅しており、黒潮町が碑文を翻字した案内板とさらに要旨を現代語で記した案内板を設置している。

（写真4）

原文の翻字は次のとおりである。

嘉永七甲寅の歳十一月四日昼微々の震動有

潮海滑に流れ溢る土俗是を名て鈴浪と云ふ

是則海嘯の兆也其翌五日朝土俗海嘯に至に満眼

の海色洋々として浪静也欣然として家に帰り平素の業を事

とす時に申剋に至て忽大震動瓦屋茅屋共崩家と成満眼に

全家なし氛埃濛々として暗西東人俱に後先を争ふて山頂に登山上

より両川を窺見るに西牡蠣瀬東吹上川を漲り潮正溢る是即海

嘯屋也最初潮頭緩々として進第二第三相追至第四潮勢最猛大にして



写真4 記念碑の案内板



写真3 加茂神社の「鈴波」に関する地震津波記念碑

実に胆を冷す家の漂流する事数を覚ず通計に海潮七度進退す初夜

に至て潮全く退く園は砂漠と成り田畛更に海と成る当時震動する事劇しく

曾聞宝永四丁亥歳十月四日も同然今に至りて一百四十八年今此石此邑

浦の衆人勞を施して是を牡蠣瀬川の辺より採りて此記を乞来是を

後人に告んが為ならん鈴浪果たして海嘯

の兆なり向來百有余年の後此言を

知るべき也

野並晴識

安政四年

丁巳年六月朔

入野村浦

若連中

地震が発生して、〈曾て聞く宝永四丁亥歳十月四日も同然、今に至りて一百四十八年。今、此石、此邑浦の衆人、勞を施して、是を牡蠣瀬川の辺より採りて、此記を乞来。是を後人に告んが為ならん〉としており、後世の人々への教訓として村人が牡蠣瀬川から石を運んでこの碑の文案撰述を野並晴に依頼したことが記されている。

村人達は〈鈴波は地震津波の予兆である〉ことを百年後の人々にも伝えたいということを願って、石の採取から碑文の依頼までを実施したのであった。

ところが、先述したように、碑文自体も摩滅し、しかも文語文で「海嘯」「欣然」「氛埃濛々」「田畛」といった漢語

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）

が散りばめられており、格調の高さはあっても現代の人々が一読して理解できる内容のものにはなっておらず、教訓型地震津波記念碑としての機能は減じているといえる。

これに対し、黒潮町は、この内容の要旨を作成して、看板として設置し、理解が進むように工夫した取組を行っている。

嘉永7年（＝安政元年、1854）11月4日の昼、かすかな地震がありました。潮がなぎさに満ちてきて、俗に鈴波と呼んでいます。これは津波の前兆（前ぶれ）です。

翌日11月5日は何事もなく日常生活に復しましたが、申の刻（午後4時）頃大地震が起こり、瓦葺きの家も茅葺きの家も倒壊し、見渡す限り建っている家は一軒もありませんでした。土煙が立ちこめるなか、人は争って山の頂上目指して登りました。牡蠣瀬川、吹上川に潮が漲りました。

津波の襲来です。津波は第1波はゆっくりと進み、第2波、第3波がそれを追いかけてきました。第4波で最大となり、夜になるまで7回波が襲ってきました。庭も水田も海になりました。かつて宝永4年（1707）10月4日も同じ事があったと聞いていますが、それ以来148年目に当たりました。村人たちは牡蠣瀬川の石を取りこの石碑をつくって後人に警告を残すことにしました。鈴波は津波の前兆です。今後100年あまりの後の世に生きる人は、この警告を知っておくべきです。

さらにこの取組が興味深いのは、碑文の要旨を英文でも併記している点にある。

A small earthquake occurred in the middle of the day of November 4, 1854, results in a slight rise in sea level, which local people popularly called "suzu-nami" and saw as a sign of tsunami waves.

This was actually followed by a large earthquake that hit the area at around four o'clock in the afternoon on the next day, November 5, causing houses, those with tiled roofs and with thatched roofs alike, to collapse together and dust to fly up, dimming the atmosphere.

People rushed, from both the west and the east, to climb up to the top of the mountain and looked down on the rivers in the west and the east to find out that both the Kakisegawa River in the west and Fukiagegawa River in the east were swelling and flooding with seawater, which was exactly what you call an "aegir."

The first tsunami wave advanced slowly while being chased by the second and third waves.

It was the fourth wave that gained the greatest momentum and scared the living daylight out of the people.

Countless houses were swept away as a total of seven tsunami waves arrived. The water receded at night, after turning fields into desert and rice paddies into sea. The monument also refers to another tsunami that hit area in 1707. The message says; "The purpose of this inscription is to inform the future generations how suzu-nami is a reliable predictor of tsunami."

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）

牡蠣瀬川と吹上川を見た村人達が「aegu」(津波)と叫んだといった一般的でない単語も見られるものの、平易な英文で理解しやすくなっている。

近代以前に建てられた地震津波記念碑は、各地で同様の措置が講じられる必要があり、さらに教訓を実効性のあるものとして伝えるためには、伝承者の存在にも注目する必要がある。

この地震津波について『理科年表』の記事は次のとおりである。

238

1854 12 24 (安政 1 11 5) 330°N 130°E M8.4

畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道…『安政南海地震』…東海地震の32時間後に発生、近畿付近では二つの地震の被害をはつきりとは区別できない。被害地域は中部から九州に及ぶ。津波が大きく、波高は串本で15m、久礼で16m、種崎で11mなど。震源近くでは地震と津波の被害の区別が難しい。死者数千。室戸・紀伊半島は南上がりの傾動を示し、室戸・串本で約1m隆起、甲浦・加太で約1m沈下した。

久礼（高知県中土佐町）は黒潮町からすると四〇キロメートルほど北東になるが、海岸の面し方は類似しており、波高は高かったものと推定できる。

この『安政南海地震』の前日には『安政東海地震』が発生しており、この地震津波が「鈴波」であった可能性が高い。「鈴波」の伝承は、東海と南海が三十二時間差で連動して発生したことの被災地での記録として捉えることができる。

3. 須崎市野見漁港の地震津波記念碑

須崎市の野見漁港は、橋で結ばれた中ノ島から北に延びる野見半島の付け根に位置する漁港である。野見湾は西側に開けており、湾内の産業としてはタイの養殖が盛んである。

この漁港では、昭和二十一年（一九四六）の南海地震で堤防が決壊した。その復旧を記念して昭和二十六年に建てられた地震津波記念碑である。（写真5）

震災復旧記念碑

（碑陰）時 昭和二十一年十二月二十一日午前四時突如南海大地震起り大津浪襲来一瞬ニシテ堤防決潰部落ヲ大海ト化ス爾後床下浸水数ヶ月人心競々凄惨ヲ極ム、其の後総工費壹阡參百萬円ヲ以堤防復旧工事ヲ完成セリ左ニ當時ノ状況ヲ記シ後世ニトドメントス地震前夜ハ天地靜寂突堤ヨリ十数米ノ間大干潟ヲ生ジ井戸ハ渴水ス地震終息後津浪来襲込約十五分部落民貴重品ヲ携へ裏山ニ避難ス津浪ハ大小六回来襲其ノ退カントスルヤ轟々鳴動シ家屋倒壊流失等其惨状筆舌盡シ難シ浸水最高満潮面上

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）



写真6 野見漁港記念碑案内板



写真5 野見漁港の記念碑

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）

十五尺バカリナリキ高潮ノ跡ヲ参考トセラレタシ被害ハ流失全壊家屋大部分ヲ占メ百七十余戸内完全ナルモノ僅カ
二二十数戸ヲ残スノミ幸二人畜ノ被害皆無ナリキ實ニ本地震災安政元年十一月四日ノ大地震ヨリ九十三年目ニ當レ
リ。

昭和二十六年九月九日野見堤防復旧促進委員會工事施工者須崎工業株式會社

この碑文については、国土交通省 高知港湾・空港整備事務所 須崎港出張所が現代語訳付きの案内板を設置して
る。（写真6）

野見震災復旧碑

（先人の思いを後世に伝える）

左の碑は、昭和21年12月21日に発生した昭和南海地震について、野見地域の伝記を基に当時の状況を記し、後世に
伝えようとしたものです。私たち一人ひとりがこの惨状を忘れることなく、来るべき南海地震に備えましょう。

以下はわかりやすいように、碑に記されている内容をまとめたものです。

国土交通省 高知港湾・空港整備事務所 須崎港出張所

（案内板・下段）

昭和21年12月21日午前4時、突然、南海大地震が起こり、大津波が来襲。一瞬にして堤防が決壊、部落を大きな
海と変貌させた。

その後、床下浸水は数ヶ月続き、人々の心は恐々として凄惨を極めた。

その後、総工費1千3百万円を費やして、堤防の復旧工事を完成させた。左に当時の状況を記し、後世に残して
おくものである。

地震の前夜、天地は静寂、突堤より十数メートルの間、大きな干潟が出来て井戸は水が枯れた。地震が終息した後、津波の来襲まで約15分。部落の人々は、貴重品を携え、裏山に避難した。津波は大小6回来襲、その津浪が引こうとする時は、大きな音がとどろき鳴り響いて動き、家屋の倒壊や流出など、その惨状は何とも表現のしようがない。

浸水の最高は、満潮時の海面から15尺（約4.5m）ほど上になり、高潮の跡（江雲寺と神明宮前の最高潮之跡）を参考として欲しい。

被害は、流失、全壊した家屋が大部分を占め、170戸あまりの内、被害のなかったものは、わずか20数戸を残すのみ。幸にして、人や家畜の被害はひとつも無かった。更にこの地震は、安政元年（1854年）11月4日の大地震より93年目に当る。

昭和26年9月9日 野見堤防復旧促進委員会

——津波に対する心得——

- 強い地震や長い時間の揺れを感じたら、直ちに近くの高台など安全な場所に避難しましょう。
 - 津波は繰り返し襲ってきますので、警報、注意報が解除されるまで安全な場所で待機しましょう。
 - 正しい情報をテレビ、ラジオ、防災行政無線などを通じて入手しましょう。
 - 日ごろから家族みんなで避難場所、避難経路を確認しておきましょう。
- ※右は、津浪から逃げる避難所のサインです。覚えておきましょう。（図）

（野見地区の避難場所：神明宮・江雲寺・県道など高台）

須工ときわ株式会社

高知県西部の地震津波記念碑の伝承内容と方法について（齋藤）

この地震津波記念碑は、被災した堤防の復旧完成を記念したものであり、地震津波そのものの記念碑ではない。しながら、地震津波の発災状況を詳しく述べており、また、末尾に安政南海地震から九十三年目に当たることを指摘して、一定期間（この場合は百年程度の期間）毎に地震津波が襲来する可能性を示しているといえる。「野見」バス停前には、明治四十四年の「埋立記念碑」があり、現在の野見漁港は埋め立てによって整備されたことがわかるが、土地整備が進んでも地震津波による堤防の決壊は免れなかったことを物語っている。

また、野見漁港から東に一キロメートルほどのところに小浦集落があり、ここにも昭和南海地震津波の記念碑と国交省による案内板が設置されている。アラバと呼ばれる高台にある恵比寿神社境内にある地震津波記念碑からは、昭和南海地震津波では九回の上げ潮があったこと、集落の大半が流出したことがわかる。

防災面からすると、「津波に対する心得」を示すことが第一義である。しかし、それとともに地震津波による被災があり、その状況のこと、その復旧に時間と費用を要したことを述べて、最後に歴史的な経験から約百年後の将来にも備えをする必要があることを啓発しているといえよう。

まとめ

以上、高知県西部の地震津波記念碑には、教訓型に分類されるものがある。その内容は、①視覚的に波高を示すもの、②予兆となる現象を示すもの、③発災状況とその後の復旧を示すものがあつた。②と③は、いずれも後世の人々に自らの被災状況を言語表現で伝えて、防災意識を高めようとしたのであるが、時代による文体差により、教訓を理解するためには時代に応じた補助的な伝達が必要になつている。その点、①は感覚として捉えられるため、訴求力は大きいとい

える。防災にとっての言語表現は、簡潔なものとし、視覚情報と組合せることで、情報量を最低限に抑える工夫により、口頭などによる伝承を必須としない伝承を構築していることが明らかになった。

(注)

- (1) 高知県西部東部の地震津波記念碑の所在については「四国災害アーカイブス」(<http://www.shikoku-saigai.com/>)、令和三年九月三十日閲覧)に大部分が収載され、歴史史料については、都司嘉宣編『高知県地震津波史料』(防災科学技術研究所、昭和五十六年三月)が詳しい。
- (2) 「小野家々譜」は『宿毛市史』による。
- (3) 宿毛市史編纂委員会編『宿毛市史』(宿毛市教育委員会、昭和五十二年三月)
- (4) 国立天文台編『理科年表2021』(第九四冊、丸善出版、令和二年十一月)

本研究はJSPS 科研費 JP17K12620 (研究代表者・古沢広祐、研究課題名・災害・復興と伝統文化の役割に関する学際的研究) の助成を受けたものです。

The Method of giving a Alerting Message of
Tsunami Monuments in Kochi Pref.

Taira SAITO

Abstract

In 1707, Oshima Island in Sukumo City was hit by a high-intensity earthquake and tsunami.

This tsunami reached the 41st step of the flight of stairs at Haitaka Shrine. Its height was approximately 10 meters.

For the purpose of alerting the future generations about the height of the tsunami, a “tsunami monument” was erected beside the step.

Seeing this monument can help visitors visually ascertain the height of the tsunami.

Since many tsunami monuments explain events in written Japanese, these explanations require interpretations attoday.

However, as the tsunami monument at Haitaka Shrine serves as a visual representation, no interpretation of the same is required.

In other words, lessons learned from the disaster are expressed through minimal use of words.

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP17K12620.

Keywords : Sukumo City,Haitaka shirine,tsunami monument,Nankai trough